

Ensemble Amedeo

Mandolin Orchestra Founded in 1980

The 20th Regular Concert

アンサンブル・アメデオ 第20回定期演奏会

ピアノ 小 川 典 子

— Happy Anniversary! —



と き：2004年1月24日(土)

ところ：文京区シビックホール 大ホール

🎵 ごあいさつ 🎵

本日はご来場いただきありがとうございます。

今回の演奏会は我々アンサンブル・アメデオにとって様々な意味を持つものとなっています。

まず何といっても節目の20回目を迎えた事です。

アメデオの設立は1980年、第1回の演奏会は1981年であり、20周年は既に通過していますが、ほぼ四半世紀(!)に渡りよく20回も続いてきたものだと、我ながら感心してしまいます。

そんなことで、今回はうしろのメンバーリストに団員各々の出場回数を載せています。めでたく20回皆勤を迎えたのはコンサートマスターの石橋君、セカンドトップの町田君、打楽器トップの荒木さん、そして不肖私中村の4名となりました。そんな中でも町田君は途中に大阪、福岡はもとよりインドネシア転勤というハンディを乗り越えての皆勤ですので(つまりインドネシアから練習・本番だけのために駆けつけた、という事です!）、まさに驚異的な記録といっていいいでしょう。現在も仙台や静岡から通っている団員がいますが、そういうメンバーに支えられて、ご覧の通りここまで巨大化(?)したアンサンブル・アメデオ(第1回演奏会では60名に満たなかったのです)を、設立メンバーの一員として大変誇りに思っています。

次にこのホールについてです。

今回演奏いたします文京シビックホール、都内では新しい、大変素晴らしいホールですが、このホールの前身は文京公会堂でした。文京公会堂といえばドリフターズの「8時だよ、全員集合!」という超人気TV番組の公開録画会場として有名でしたが、我々マンドリン関係者にとっては一種の聖地的存在であり、各大学のマンドリンクラブの演奏会や連盟の合同演奏会はこの文京公会堂で開かれていました。アメデオの中でも、高校時代に大学生の演奏をこのホールで聴き、感動で涙を流しながら、いつかは自分もこの舞台に立ちたいと思いを募らせたメンバーが何人もいます。1977年に惜しまれながら閉館となってしまう、アメデオのほとんどのメンバーは実際に文京公会堂の舞台に立つ事が出来なかった訳ですが、今日この記念すべき演奏会で聖地に凱旋したという事で、誠に感慨深いものがあります。

そして、今回共演するピアニストの小川典子さんについて。

小川典子さんには2001年の第17回演奏会に出演していただき、その時はガーシュインの「ラブソディ・イン・ブルー」を演奏しました。そもそも典子さんとは、我が団員である須藤純子さんと典子さんが幼なじみという事から共演の運びとなったのですが、その演奏会の終了後、須藤さんのピアノの師でもある典子さんのお母様の小川道子先生よりお褒めの言葉を頂戴し(実は典子さんがマンドリン・オーケストラと共演したのは初めての事で、先生はアメデオがちゃんと演奏できるのか不安だったようです)、その場で「次は是非ラフマニノフの2番を」と再演のオファーをいただいってしまったのです。

我々としては、そのようなお話は誠に光栄の至りであるわけですが、世界中を飛び回って多忙な典子さんといつ共演するのか、ラフマニノフのピアノ協奏曲2番という名曲中の名曲が果たしてマンドリン・オーケストラで演奏可能なのか、そもそも演奏して様になるのか、などいくつもの問題・課題を抱えてしまい、以後団内で協議を重ねてきました。最終的に、この20回記念演奏会にはやはりこれしかない、と決断し、またこの1月の後半は典子さんが日本にいるという幸運にも恵まれ、今日の再共演となりました。

我々がこんな事を言うのは僭越な話ですが、前回共演時より更に活動の幅を拡げられ、「世界のOGAWA」として成熟期を迎えられている典子さんの演奏は、大変な聴き物となるはずです。

最後に今日のメイン曲目である「展覧会の絵」についてです。

この曲は10年前の第10回演奏会でも演奏しました。アマチュアの音楽家にとっては大変難易度の高い曲で、当然ア
メデオにとっても大変なチャレンジとなる訳ですが、これまで19回に演奏してきた曲の中でもう一度やってみたい曲
を今回演奏しようと決め、まっさきに挙げたのがこの「展覧会の絵」です。

その理由は、①前回うまく弾けなくてやり残した部分に再チャレンジしたい、②前回は管楽器が入っていない編成だっ
たため、今回は管楽器を入れて演奏したい、③お聞きいただければ分かるのですが、有名なラベル編曲版とは違い、ム
ソルグスキーのピアノ原典版をベースにアレンジャーの小穴君が様々な研究を重ねて編曲しています。その思い入れたっ
ぷりのこの曲を小穴君自身に是非指揮をして欲しかった（前回は違いました）、などです。

また付け加えると、小川典子さんはこの曲を大変得意にされており（ムソルグスキーの手書き楽譜から研究をされて
います）、その典子さんに我々の「展覧会の絵」を聴いていただけるのは、大変栄誉な事であると感じています。

以上のような思い入れの多い第20回演奏会、どうぞ最後までゆっくりとお楽しみ下さい。

また来年で設立25年となるアメデオを、今後とも温かくご支援戴きます様よろしくお願い致します。

アンサンブル・アメデオー同
代表 中村 亨

＜みなさまへのお願い＞

アラーム付きの時計、携帯電話の着信音などの消音の設定をお願いします。

また、小さなお子さまをお連れのかた、お連れのお子さまが他のお客様のご迷惑となら
ないように、ご配慮いただけますようお願いいたします。

表紙絵：小穴 由 梨

🎵 プ ロ グ ラ ム 🎵

♪ プログラム ♪

第 1 部

指揮 中村 亨

◆ イタリア奇想曲

P.I.Tchaikovsky

Capriccio Italien

◆ ピアノ協奏曲第 2 番ハ短調

S.Rachmaninoff

Piano Concerto No. 2 in C Minor

第 2 部

指揮 小穴 雄一

◆ 組曲「展覧会の絵」

M.Mussorgsky

Bilder einer Ausstellung

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～1893）

イタリア奇想曲

1878年の暮れにモスクワ音楽院教授を辞め、ある程度時間のできたチャイコフスキーは、各地に旅行するようにもなりました。この曲は、1879年の暮れに弟モデストとともにベルリン・パリを経てローマに旅した時に、イタリアの印象をスケッチしたものです。

曲は、奇想曲の名のとおり、特定の形式に拘束されない自由なもので、チャイコフスキーがローマで知ったイタリアの旋律のいくつかを巧みに配列しています。導入部はローマの滞在中、ホテルの前庭のイタリア騎兵隊の宿舎から毎日聞こえてきたというファンファーレです。途中、管楽器で奏される8分の6拍子の明るいメロディーは、イタリア民謡「美しい娘」に基づいています。そして曲はタンパリンの奏するタランテラのリズムで、明るく、高らかに、力強く終わります。

暗く、重々しい作品が多いチャイコフスキーの曲の中で、最も明るく、楽しい雰囲気を持った曲といえるでしょう。

◇作曲者について

ロシアの生んだ名高い作曲家で、ロシアのベートーヴェンともいわれています。幼少の頃から音楽の才能はあったのですが、最初は法律学校に入学し、音楽はアマチュアとして勉強していました。1861年に正式に音楽学校に入学して作曲を学び、音楽家の道を歩み始めました。彼はロシアの国民性にドイツやフランスの洗練されたスタイルを加え、独特の地位を築きました。数々の名曲を作りましたが、特に名高いものは、交響曲「第4」「第5」「第6（悲愴）」、序曲「1812年」、「スラブ行進曲」、「弦楽セレナード」、「アンダンテ・カンタービレ」、バイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲、バレエ音楽「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」などで、どれも美しく人の心を動かすものばかりです。モスクワ音楽院の先生をしたり、スイス、イタリア、アメリカなど欧米各国を、自作を指揮して演奏旅行をするなど、目ざましい活躍を続けました。ところが、1893年11月6日生水を飲んだのが原因でコレラにかかり、この世を去りました。



チャイコフスキー

セルゲイ・ヴァシリーエヴィチ・ラフマニノフ（1873～1943）

ピアノ協奏曲第二番

ラフマニノフという作曲家にとって、このピアノ協奏曲第二番は、人生の転機となった曲といえるでしょう。それは、作曲家として一度挫折を味わったラフマニノフが、復活を果たすきっかけとなった曲だからです。

若くして才能を発揮し、チャイコフスキーにも才能を認められたラフマニノフは1892年19歳の時に有名な「前奏曲嬰ハ短調」を作曲し、すでに教壇に立ち、演奏活動も行うようになっていました。1895年には野心作「交響曲二短調」を作曲しましたが、これはまるっきりの失敗作でした。初演は大不評で、批評家からは酷評され、新聞には「地獄に音楽院があっ

🎵 曲目解説 🎵

たなら、ラフマニノフは優等生だ」といった批評まで書かれてしまいます。この失敗によって、繊細なラフマニノフは作曲に対し極度の自信喪失におちいってしまったのです。

作曲をやめ、演奏活動に打ちこもう、と考えていたラフマニノフは、ロンドンのフィルハーモニック協会に招かれ、ピアニストとして大成功を収めました。その上、協会からは新しいピアノ協奏曲の作曲も依頼されたのです。ところが、かつての心理的打撃は重くのしかかり、その作曲は遅々として進みませんでした。

この不幸な状況から彼を救ったのは、精神科医のニコライ・ダール博士です。彼は自分でもチェロを演奏する音楽愛好家で、ラフマニノフの才能をなんとか救いたいと考え、暗示療法を試みたのです。3ヶ月にわたる治療の末、ラフマニノフは回復し、作曲にとりかかることができるようになりました。

1901年、完成した曲は自身のピアノとシロティの指揮で初演が行われました。その結果はダール博士の暗示「君は協奏曲の作曲を始める。そしてその協奏曲は傑作になる」との言葉通り、大成功をおさめ、作曲家としてのラフマニノフの名前は一躍世界に知られるようになったのです。

各楽章の解説

第一楽章：モデラート、ハ短調、2分の2拍子。重々しい鐘の音を模したようなピアノの和音による導入ではじまります。続いてオーケストラで示される第一主題は「情熱をもって」と示される暗い情熱に満ちた旋律です。第二主題はピアノが単独でより甘美でニュアンスに富んだ旋律を奏でます。この2つの主題をもとにソナタ形式で作曲されています。この曲で特徴的なことは、第一主題の提示、第二主題の提示、展開部など、各部分がそれぞれクライマックスの強奏によって結ばれ、推移が大変分かりやすくできていることです。

第二楽章：アダージョ・ソステヌート、ホ長調、4分の4拍子。3部形式をとる抒情的緩徐楽章。弦と管楽器による序奏ののち、アルペジオを奏でるピアノの上に管楽器が甘美な主題旋律を演奏します。

第三楽章：アレグロ・スケルツァンド、ハ長調、2分の2拍子。力強いスケルツォ風の主題と情緒に満ちた優美な主題という鋭い対比をなす二つが交互に現われながら進行する一種のロンド・ソナタ形式と言えるでしょう。特に後者の美しさは格別で、アメリカではこれに歌詞をつけてポピュラー音楽として歌われたほどです。

◇作曲者について

ロシアを代表する作曲家・ピアニストであったラフマニノフは、1873年セミョノフの生まれ。父は近衛隊将校という由緒ある貴族の家柄で、4～5歳の頃から母や祖父からピアノの手ほどきを受けました。ところが1882年、農奴開放政策の影響で一家が没落し家族はペテルブルグへ移住。これに伴ってペテルブルグ音楽院へ入学、やがてモスクワ音楽院へ進むことになった彼はピアノをズヴェーレフやシロティに、また対位法や和声などの作曲技法をタネーエフやアレンスキーに師事しています。

音楽院在学中からピアノと作曲ですでに抜きん出た才能を発揮したラフマニノフは、最初の歌劇「アレコ」がモスクワのボリショイ劇場で上演されるなどいち早く頭角をあらわし、チャイコフスキーにも賞賛されるなど順調に作曲家としての道を歩むかに見えました。それからの交響曲第一番の失敗とピアノ協奏曲第二番の成功の経緯はご紹介した通りです。

結婚や長女の誕生を経て安定した私生活を得た彼は「吝嗇な紳士」「フランチェスカ・



ラフマニノフ

「ダ・リミニ」という二つの歌劇を完成させるとともに、その初演を含め 1904 年から 2 シーズンの間、ポリショイ劇場の指揮者として活躍しました。このときの指揮者としての手腕は後世まで語り継がれるほどすぐれたものだったと伝えられています。しかし、作曲に専念する必要性を感じたラフマニノフは 06 年イタリアを経由してドイツのドレスデンに移り住み、この地で交響曲第 2 番などを作曲することになりました。また 1909 年には初めて演奏旅行でアメリカ合衆国を訪れ、ツアー中に完成させたピアノ協奏曲第 3 番を自ら独奏して初演を成功させています。その後もピアノ練習曲集「音の絵」や合唱曲「晩禱」なども生み出した彼でしたが、ロシア革命の勃発による混乱を避けて 17 年、北欧を経由してアメリカへの亡命を敢行する運命をたどりしました。ところが新大陸でのラフマニノフの名声はもっぱら演奏家として知られていたこともあり、彼に求められた活動はほとんどピアニストとしてのものに限られ、亡命後の作品数は次第に少なくなっていくます。

そして 1943 年、ラフマニノフは米国の市民権を獲得しますが、ソ連政府の招きに応じて帰国の準備を進めるうちに病に倒れ、結局は祖国の土を再び踏むことのないままカリフォルニア州ビュアリーヒルズで生涯を閉じました。

モデスト・ペトロヴィッチ・ムソルグスキー 「展覧会の絵」

「展覧会の絵」という一風変わったタイトルを持つこの曲は、作曲者ムソルグスキーが実際に訪れた展覧会に発想を得て作られたものです。ただ、この展覧会は彼にとって単なる展覧会ではありませんでした。無二の親友であるガルトマンの遺作展だったのです。

ドイツ系ロシア人のデザイナー・画家であるヴィクトル・アレクサンドロヴィッチ・ガルトマン（1834-73）とムソルグスキーの交友は、1870 年頃に始まったと言われています。1860 年代に交友が盛んだった「5 人組*」の関係が徐々に希薄となってきたさなか、良き支援者であった評論家スターソフの仲介で、二人は出会ったのです。ロシアの文化と歴史に深い関心を持っていたムソルグスキーは、同じくロシア的なモチーフを作品にとりこもうとしていたガルトマンと意気投合しました。彼らは頻繁に会って音楽や芸術を論じていたそうです。芸術によってロシアに貢献し、ロシア様式を創造・確立することが彼らの共通の目標でした。



ムソルグスキー

ところがその交友は長続きしませんでした。1873 年 7 月、ガルトマンは動脈瘤のため急死したのです。これに際し、ムソルグスキーはその死を悼む手紙の中で、最後に出会ったときのエピソードについて述べています。「散策中、ガルトマンは突然息切れし立ち止まりました。しかし、私はその病状を気遣いもしなかったのです」と自責の念を語り、最後にはこう記しました。「彼の死でロシア芸術は孤児となり、多くの試練にあう」と。

ガルトマンも同じエピソードを手紙に綴っていました。短い文章ですが、そこには次のように記されています。「私が取り乱してしまったのにもかかわらず、ムソルグスキーはとても親切にしてくれました。彼は私にとって、いつも神様のような存在です」

1874 年 2 月、スターソフらの奔走でガルトマン遺作展が開かれ、絵画と設計図など約 400 点が展示されました。そこに訪れたムソルグスキーの心の内には、強烈なインスピレーションが生まれました。それが、ピアノ曲「展覧会の絵」作曲の原動力となったのです。

🎵 曲目解説 🎵

作曲の最中、ムソルグスキーはスターソフに手紙を送っています。「僕は全力でガルトマンに取り組んでいる。音の響きとアイディアはまだ曖昧だ。僕はそれを飲みこみ、まわりをかじり、かろうじて書きなぐる。早く思い通りに仕上げたい」と。実際、この作品は 1874 年 6 月の 3 週間という期間で書き上げられたのです。

この曲はムソルグスキーの没後 5 年の 1886 年に出版されながら、長きに渡り注目されませんでした。原作者の死から約 40 年後、ほぼ忘れられたこの作品をパリで復活させたのがオーケストレーションの魔術師、ラヴェルによる編曲です。

もともと、原曲のピアノ曲の多彩な表現は、当時のピアノ音楽のイメージやこの楽器の可能性を超えており、ムソルグスキーには管弦楽編曲の意図があったとも言われています。その作品をもとにラヴェルは、管楽器と打楽器を効果的に使い、音色と強弱をダイナミックに多様に変化させ、単純な表現から華麗な色彩効果をひきだしたのです。初演は好調で、以後世界各地でこの曲が演奏されるようになりました。ラヴェル以降も、ストコフスキーやアシュケナージなど多くの音楽人が編曲に挑戦しています。

アメデオが今回演奏するのは、小穴雄一氏によるマンドリン合奏・管楽器・打楽器・ピアノのための編曲です。第 10 回演奏会のときの編成に管楽器はありませんでしたが、今回は加わり、より一層多彩で色彩豊かな表現ができるようになりました。

* 5 人組…ロシア国民楽派とも呼ばれ、19 世紀後半のロシアでロシア音楽を志向した作曲家の集まりで、バラキレフ、キューイ、ムソルグスキー、リムスキーコルサコフ、ポロディンがメンバーです。特にバラキレフが指導的役割を果たしていました。



ガルトマン

各曲の解説

この曲は、プロムナードと呼ばれる間奏が、遺作展の出展作をモチーフにした 10 曲をつなぐ構成です。ちょうど展覧会に訪れた作曲者が、会場を歩きながら一つ一つの絵を見ていく様子を表しているようです。特にプロムナードの部分には、絵から絵へと移動する間の作曲者の心境が色濃く表現されています。

この作品に収録された 10 曲のもととなった原画については、かねてから調査が行われてきました。最近では、NHK の番組での調査が本にまとめられています。それによれば、明確に作品が特定できるものもありますが、複数の原画を一つの曲にしたと考えられるもの、特定が難しいものなどがあり、今なお議論の種になっているようです。今回は NHK の調査に基づいた原画を掲載しながら、各曲を紹介していきたいと思います。絵画を鑑賞し、作曲者の心境を想像しながら、曲を聞いていただければ幸いです。

プロムナード

散歩・遊歩という意味を持つ一種の間奏曲です。以降各曲の合間に挿入され、ムソルグスキー自身の心の内を巧みに表現しています。4 分の 5 拍子と 4 分の 6 拍子が繰り返されるロシア風の素朴で力強い主題を持ち、楽譜にも「ロシア風に」との記載があります。あくまでロシア的な音楽を表現しようとするムソルグスキーの気持ちが現われているといえるでしょう。

グノーム

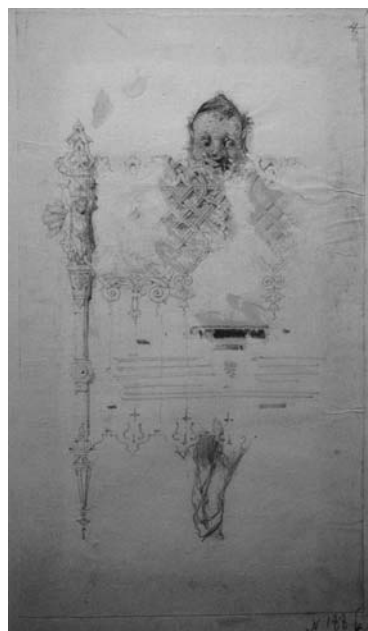
グノームは、ロシアの伝説に登場するこびとで、地の底に住み、奇妙な格好で動き回ります。ガルトマンはクリスマスツリーを飾るために寓話に登場するグノームのくるみ割り人形をデザインしました。地底で動き回るグノームの奇怪な姿が曲でも表現されています。

古城

イタリア語で書かれた題名や、スターソフのコメントから、イタリアの中世の城の前で吟遊詩人が歌っている絵画だと推測されています。ところが、遺作展にはフランスの城はありましたが、イタリアの城の絵は出展されていませんでした。マンドラが演奏するひなびた旋律が、吟遊詩人の歌を表しています。

テュイルリー

自筆楽譜には、「遊びのあとの子供たちのけんか」と記されています。テュイルリーは、パリにある有名な公園の名前です。遺作展の作品カタログにはテュイルリー公園を描いた作品があったとの記録がありますが、絵は紛失してしまったようです。掲出の絵画はガルトマンがパリで子供を描いた絵ですが、そこに公園は描かれていません。子供のけんかとそれをたしなめる親を描いたかわいらしい小品です。



第1曲「グノーム」。ガルトマンが学んだペテルブルグの美術アカデミーに、卒業作品として保存されていた。スタソフの残したカタログにNo.239として記録されていた絵である。



第2曲「古い城」。この絵はオペラ『ルスランとリュドミーラ』の舞台装置のために描かれたデッサン「チェルノモールの城」。スタソフは「城の前で吟遊詩人がうたっている」と書いたが、この絵にも人影らしいものが見える。(プーシキン博物館蔵)



第3曲「テュイルリーの庭」。ガルトマンという署名と「パリ」という文字が書きこまれているスケッチ2枚。だが庭の絵はない。(ロシア美術館蔵)



ビドロ

ビドロは、ポーランド語で2つの意味が存在します。①家畜（牛）②（家畜のように）虐げられた人々。スターソフによれば、この曲は牛車を表しているとのことですが、そのような絵画は遺作展のカタログには残っていませんでした。曲の重々しさ、ガルトマンがポーランドで描いた唯一の絵画（掲出の絵画「ポーランドの反乱」）などに基づいて、抑圧されたポーランドの民衆を描いたものだとする意見もあります。ムソルグスキーがスターソフに送った手紙の中では、ロシア語の解釈によって、ビドロは牛車とも、そうでないともとれるように記されており、この議論には今なお結論は出ていません。



第4曲「ビドロ」。「ポーランドの反乱」と題された鉛筆書きのスケッチ。教会とギロチンと兵士たちの姿が描かれている。「ビドロ」のモチーフとなった絵なのかスタッフのなかで意見がわかれた。（アブランツェボ美術館蔵）

殻をつけた雛どりのバレエ

ヴァイオリンの名手ゲルベルはポリショイ劇場でバレエの指揮・作曲に活躍しました。彼のバレエ「トリルビー」の衣装デザイン画として、この絵は描かれたのです。この衣装は「小さな子供たちがカナリヤになって叫び声をあげる」という場面で利用されました。曲はまさに雛どりの跳ね回るかのようなリズムを刻んでいます。

サミュエル・ゴールデンベルグとシュミュイレ

ガルトマンは金持ちで篤志家風のユダヤ人と貧乏でみすばらしいユダヤ人、二枚のスケッチをムソルグスキーに贈りました。ムソルグスキーはその2枚の絵画をもとに一曲のドラマを作りだしたのです。最初に登場する重々しい旋律が金持ちのゴールデンベルグ、続いて登場する小さくせわしない響きが貧乏なシュミュイレを表しています。やがて二つの旋律は重なり合い、最後にはゴールデンベルグがシュミュイレを圧倒して終わります。



第6曲「サミュエル・ゴールデンベルグとシュミュイレ」。ポーランドのサンドミルで描かれた金持ち（左）と貧しい（右）二人のユダヤ人。この時代もユダヤ人は迫害されていた。（トレチャコフ美術館蔵）



第5曲「卵の殻をつけたひなの踊り」。バレエ「トリルビー」のための衣装デザイン。（プーシキン文学研究所蔵）

リモージュの市場

リモージュは陶器産業で有名な中部フランスの街です。自筆楽譜には「女たちがけんかをしている。はげしく激昂してつかみかからんばかりに」との描写があります。この原画は紛失してしまったとの説もありますが、フランスで描かれた14枚のスケッチを該当とする説もあります。市場に集まる女性たちのせわしない会話を曲は描いています。



カタコンブ

パリの地下墓地の絵にはガルトマン自身の姿も描かれています。自筆楽譜には「亡くなったガルトマンの創造精神が私を頭蓋骨へと導いている。やがて頭蓋骨は静かに輝きはじめる」との記載があり、それに続くプロムナードには、「死者とともに死者の言葉で」との副題がつけられています。ムソルグスキーがガルトマンに捧げたレクイエムとも言えるでしょう。



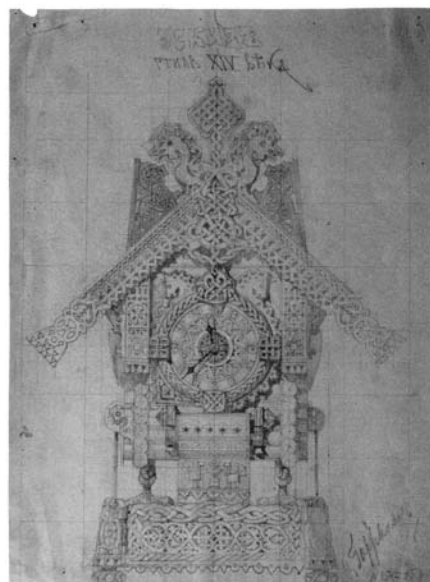
第7曲「リモージュの市場」。フランスで描かれた全部で14枚からなる鉛筆書きのスケッチ。(サルティコフ＝シCHEDリン図書館蔵)

鶏の足の上に立つ小屋（バーバ・ヤガー）

バーバ・ヤガーは、ロシアの子供たちにはおなじみの妖怪（魔女）です。深い森の中で、人骨の柵に囲まれた鶏の足の上に立つ家に住み、ほうきによって空を飛びます。そして、道に迷った人間を自分の小屋に連れこんで食べてしまうのです。ガルトマンはバーバ・ヤガーの小屋を模した時計台のデッサンを残しました。バーバ・ヤガーのスピード感あふれる行進とおどろおどろしい魔女の得体の知れない怖さを表す中間部からなります。



第8曲「カタコンブ」。ガルトマン自身らしい男が描かれている。そばには骸骨。楽譜には「亡くなったガルトマンの創造精神が訴えかけてくる」と書かれているパリの地下墓地。水彩の小品。(ロシア美術館蔵)



第9曲「バーバ・ヤガーの小屋」。鉛筆で書かれた時計のデッサン。ロシアの伝説に登場する魔女バーバ・ヤガーを型どったもので、めんどりの足の上に立つ小屋に住む妖怪。(サルティコフ＝シCHEDリン図書館蔵)

ボガティルーキエフの大門

ウクライナの首都キエフには、市街地の中央に一つの門が残されています。「黄金の門」と呼ばれ、11世紀にヤロスラブ大公によって作られました。ロシアに初めて統一王朝ができたとき、ヤロスラブ公が外敵を退けたことを記念して作られました。ボガティルとは、ロシアの伝説的英雄の名前です。

ガルトマンが生きた時代にはこの門は破壊され荒れ果てたままとなっていました。曲のモチーフとなった絵は、ガルトマンがこの門を再建するために設計した新しい門のためのデッサンです。この絵は、キエフ市が開催したコンテストに応募され、大好評を博しましたが、門の建設は実現されませんでした。

教会から聞こえてくる聖歌隊の合唱・鐘楼から鳴り響く鐘の音など、絵から伝わってくる壮大な情景が曲に反映されています。「栄光のロシア」を見事に表現し、ロシア的なものをすべて凝縮してこの曲は幕を閉じます。

(渡 邊 安 彰)



第10曲「キエフの大きな門」。11世紀に建てられたキエフの「黄金の門」の再建のために書かれたデッサン。だが、ガルトマンのこの建築作品は陽の目を見なかった。(プーシキン文学研究所蔵)

◇参考文献

- 「クラシック名曲ガイド②管弦楽曲」音楽の友社
 「クラシック名曲ガイド③協奏曲」音楽の友社
 ショーンバーグ作 亀井旭・玉木裕 訳「大作曲家の生涯」共同通信社
 團伊玖磨・NHK取材班「追跡ムソルグスキー『展覧会の絵』」NHK出版
 スコア「ムソルグスキー（ラヴェル編曲）展覧会の絵」音楽の友社
 スコア「展覧会の絵（ピアノ譜）」日本楽譜出版社
 アビソワ著 伊集院俊隆 訳「ムソルグスキーその作品と生涯」新読書社
 ロイヤル・フィルハーモニック・コレクション42 CDジャケット
 BMG Rachmaninoff Piano Concertos Nos.1-4 CDジャケット

あらためて振り返ってみると、じつにいろいろなことをやってきたものだなあというふうに思います。動機は単純で、「これをやってみたい」というだけのことです。そうするとマンドリン合奏の場合「楽譜がない」というところから始まるんですね、だから誰かが作らなきゃならない。それで気がついていたら、ぼくが編曲していました。それだけのことです。演奏してくれるひとがいるから編曲するわけで、まさに必要にかられて、なんとか締切りまでに仕上げる、これの繰り返しでした。しかし、演奏していただけるわけですから、これはやりがいがあります。

曲が決まってから練習が始まるまでには、たっぷり時間がありますから、いろいろ材料を集めて、吟味して、もちろん原曲のあらゆるバージョンの音源も聴いたりします。のんびりとそんなことをやっていると、あっという間に時間が経ってしまいます。そこで慌ててどうにか形にするって具合です。ですから大抵楽譜は未完成な状況で配られることになります。練習をやりながら調整していくんですね。編曲という作業は結構手間がかかるものです。

一番やっかいなのは「その気にならないとできない」ということでしょうか。ぼくの場合、頭のなかを音が駆け巡るようなタイプではありませんので、音を鳴らしながら探っていくようなやりかたです。なんていうか、その場任せで取り組んでいきます。偶然的所産といっても過言ではありません。ところが気分が乗ってくるとこれがすらすらいくんですね。次から次へとアイデアが浮かんできて、ここはこうしよう、あそこはああだ、とか、ここがこうならあそこはむしろこう変えた方がいいのでは、という具合にとんとんと筆がすすんでいきます。そこに辿り着くまでが大変。気分を昂揚させていって、今日はできるぞ！と自らを鼓舞してそれで勢いをつけて発進するんです。「突撃！！」みたいに。それでもだめなときは何も浮かんでできません。そういうとき作業は一向にはかどらず、先へ進むことができない状態に陥るんですね。いわゆるスランプっていうやつです。曲のイメージが充分掴みきれていないときにこうなるケースが多いようです。

モチベーション的には、ラフマニノフは大変でした。はなからマンドリンでやるのは厳しい、という代入感がありましたので、なんていうか恐ろしいような感じがしたんですね。マンドリンではやっちゃいけないんじゃないかって… 調性もフラットが多くマンドリンには不向きでしたし、これは難航しました。曲は大好きで結構聞き込んでいましたから、改めて聞き直すようなことはほとんどなかったと思います。いろいろマインドコントロールをかけて、最後に行き着いたところは、まったく別な曲とってみよう、ということでした。これでふっきれて、「バラライカオーケストラ」だと思えばいいのだ！と一気に駆け抜けていきました。それにしてもなんて素晴らしい曲なんでしょう！一旦始めるとどんどんのめり込んでいきました。

編曲は写経に似ています。ラフマニノフの楽譜を眺めながらそれを写していくんです。そうすると、いろいろな仕掛けや技やそういうものが見えてきます。それで、どうしてこのようにロマンティックな流れが表せたのだろうかと感動したりしていました。ラフマニノフの編曲でいろいろなことに気付いたんですが、クラリネットがおいしいんですね。当時の身近なオケに素敵な人でもいたのでしょうか？それともあの甘い音色そのものが好みだったのでしょうか？ラフマニノフにはクラリネットが欠かせません…。それから2楽章ですね。聴こえてくると音符がずれているんですね。なぜあいうことになったのか？音を追い掛けるように音符を配置することで、なにかを憑かれたように表したかったからなののでしょうか？そんなふうに思いながら眺めていました。それにしても2楽章の最後はなんて素晴らしいんでしょう！パーンシュタイン指揮ピエールアントルモンのピアノの演奏でそれを聴いたときのことがいまでも焼き付いています。その広大な大地に沈む夕暮れのような壮大な音楽！ああ、生きていてよかった！典子ちゃんはどんなふうに弾いてくれるのでしょうか。

それにしてもピアノの凄まじいこと！こんなの弾けるのでしょうか？楽譜を書き写すだけでも大変！それで、結局今回はピアノの譜面を書き写すのは断念することにしました。松原さんの協力で編曲したスコアに原譜のピアノの部分を貼り付けたのでした。

アメデオは毎年1月に演奏が終わるとオフシーズンに入りますが、ぼくにとってはこのオフ期間が作戦準備期間ということで、潜伏してこういう作業に勤しんでいます。それで夜中にこういう作業をしながらひとりで感動したりしているんです。

🎵 編曲ノート 🎵

ぼくは、いつのまにかこうした仙人のようなことに喜びを感じるようになったのです。そういう機会をアメデオは授けてくれました。だって、弾いてくれるひとがいなかったら編曲なんて絶対にできないと思うからです！

ところで、編曲という作業は料理に似ています。料理はそんなにやるほうではありませんが、どちらかといえば好きな方だと思います。この間はヴィヤベースにチャレンジしました。（※作り方参照ください。）結構いい味ができました。魚のだしとハーブの微妙なバランスがポイントでした。風糸で野菜を縛ってブーケガルニを作ってスープに入れてコトコト煮込みました。それで芳醇な香りが立ち込めてとても幸せな気分！しかし思ったより量が少なく主菜にしては頼りないものに…おおよそ素人のやることはこのようなものです。

ぼくの編曲も似ていますね。もっとしっかりとした音楽の基礎があればもっと堅固な仕上げができるんでしょうが。ですからも決まって仕上げは演奏者の知恵と工夫にかかっています。これは全てのパートに共通したことではありますが、なかでも典型はギターでしょう。ぼくはギターを弾きません（弾けません）ので、いつもギターパートは工夫の連続に違いありません。ぼくは材料を提供しますが料理を仕上げるのはギターのみなさん次第です。しかし、この暗黙の了解という関係がいつの間にかできあがってきました。ですから、ぼくの編曲を他の団体がやろうと思ったら大変です。いわゆるレシピが必要になってくるんですね。弾き終わった楽譜を使えばいいのでしょうけど、それを整理するというエネルギーは残っていません。というわけで、ぼくは編曲の材料を提供し、最終的にはアメデオのメンバー全員で工夫して練り上げていくことだと思っています。そうした過程が楽しいものです。もちろんうまくいかないこともあります。今回も亨くんがいろいろな音を加筆してくれました。というわけでとりとりのめのない話しになりましたが、こんなふうに編曲をやってきました。

最後に「展覧会の絵」についてひとこと触れておきたいと思います。この曲はいろいろ思い入れの深い曲で、この曲を最初に編曲したのは1987年ごろ、その年の1月だったと記憶しています。その頃ぼくはホテル関係の仕事をしていましたが、マンドリニストの青山くんから突然電話があり「展覧会の絵をやりたい」という提案でした。その翌年にクリスタルマンドリンアンサンブルという団体に演奏しました。当時これは大変なことで、練習してもなかなかうまくいきません。最後までまともに通ったのは本番くらいのことでしたが、かなり理想に近い演奏が出来たというふうに思い出されます。変化に富んだこの作品はモノトーンのマンドリン合奏で表現しても意外に楽しめました。アメデオ第10回の演奏会でもこの曲を取り上げました。このときも結構大変でした。大所帯なりの大変さがありました。第10回はアメデオも弦楽だけの編成でしたが、打楽器を加え、編曲も改訂しました。「展覧会の絵」はその後関西の「モザール」という団体で取り上げられました。そのときは管楽器を加えて演奏したと聞きました。最近では昨年「アルスノヴァ」という団体に演奏されました。そのときには、改めて編曲し直しました。それまではいわゆる手書きのスコアでしたが（昔は横長の五線紙に鉛筆で書いていました）整譜しながらコンピュータに入力しました。「アルスノヴァ」のときは実際に大阪まで聴きに行きましたが、じつに湧溺とした演奏で、練習時間が短かったこともあり荒っぽいところもありましたが、その分勢いがありなかなか凄まじい演奏でした。

今年第20回という節目に「展覧会」を再びとりあげるということは割合早い段階で決まりました。我々にとっても思い入れの強い作品ですので、おそらく、30回という回が来るのであれば、そのときも「展覧会」をやることになるのかもしれませんが。今回は、最近のアメデオの標準編成用にさらに編曲し直しました。管楽器を加え、いままで合奏効果の不十分だったところを補強し、もちろん回を重ねるごとに演奏者のみなさんから提案いただいたことなど、さまざまなことが折り込まれました。それで練習に取り組んでいるわけですが、これはかなり難しいです。何が難しいかというと…、もちろん調性もやっかいですが、音楽の表現が一筋縄ではいきません。ただ弾くだけでは曲にならない。イメージーションの問題です。それで、今回は徹底的に「響き」にこだわってみたいと考えやってきました。さまざまな音色、さまざまな響きを表現する。そういうことを目指しています。ブロムナードの祝典的な響き、グノームの無気味さ、古城のうっとりするような調べ、甘ったれ小憎のおねだりのようなティユルリー、ピドロのどろどろした呻声、雛鶏の滑稽さ、ゴールデンベルグとシュミュイレ

の傲慢と貧弱の対比、リモージュの喧騒、カタコンブの追悼、死せる魂との対話の神秘、バーバ・ヤガーの機知、そしてキエフの壮麗。メンバー全員で一致凝集して壮大なる展覧会の絵巻物を描き上げてみたいと試みています。果たして本番までに間に合うのでしょうか？それとも、その完成は30回に…？

2004年正月

小穴 雄一

※ヴィヤベースの作り方

まずスープ用材料の下ごしらえから。ほうぼう、こち、あなごを3 cmくらいのぶつ切りに。舌平目も加えましょうか。頭から骨ごとでOKです。次に貝になる材料。前回は海老と帆立貝それにあざりと（ほんとうはムール貝も欠かせないらしい）それから鯛と鰯を用意しました。

最初は鍋にオリーブ油をいれてにんにくと赤唐辛子を炒めます。このとき温度が高いと焦げちゃうので用心！ぼくなんかやりなおしました。弱火でじっくりはじめます。つぎに、たまねぎとポワロー（長葱）それからほんとうはフェネルの株を入れんだそうですけど、ぼくは観てくれがミニセロリにそっくりだったのでこれで代用しました。やわらかくなるまでじっくり炒めてとろりとなるまで…そこにスープ用の魚をどっといれます。魚がやわらかくなったら白ワインを入れる。しばらくしたらトマトジュースとペーストをいれてひたひたになるくらいに水も加える。そこでブーケガルニを入れる（長葱にパセリの茎、ローリエ、ローズマリーを包んで尻糸で縛る）それで沸騰させましょう！あくを念入りに取り除いて、調味料を入れます。（量は勘と度胸で！）塩、八角、フェネルシードそしてサフラン！（これ高いです！）それで弱火でしっかり煮込む。このあたりですすでに幸せな香りが台所中に立ち込めます。

じっくり煮込んだら、裏ごしです。これでスープをとります。

つぎに貝のほう。フライパンにオリーブ油を敷いてその上で鯛と鰯の皮のほうだけさっと焼きます。焼色をつけると身がほぐれにくくなるから…

他の材料とともに鍋に入れて蓋をして弱火で煮込みます。それで完成！フランスパンは軽く焼いてそれでスープをしみ込ませて味わえば心の底から豊かな気分に入れます！是非お試しを…ちなみにほうぼうとか、こちとか、あなごの処理は結構勇気がいりますのでスーパーでおろしてもらうとよいでしょう！ Good luck！

アンサンブル・アメデオ第20回記念演奏会に寄せて

小川典子

アメデオの皆さん、第20回記念演奏会の開催、おめでとうございます。

3年前の演奏会でラプソディ・イン・ブルーを御一緒に以来、アメデオの皆さんと私は、さらに大きなピアノ協奏曲で共演したい、と言う思いをひとつにして来ました。今日ここに、世界初、マンドリン・オーケストラによるラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第二番が披露されます。

音楽愛好家の方々は、あの有名なコンチェルトをマンドリンでどのような味付けに、と興味を持たれていることでしょう。このマンドリンとピアノの組み合わせ、実に新鮮な響きに満ちています。小穴雄一さんの名アレンジによるところはもちろんです。が、中村亨さんのバトンによる演奏をお聴き頂いたら、ラフマニノフは、取りも直さずバラライカの国から来た作曲家だったことに気づき、また納得して頂けると思います。

アメデオの皆さんは、一人一人個性的な音楽家であると同時に、それぞれ神経を使う仕事を持っています。皆さんの職業を聞いては、「こんな優秀な人たちと共演できるなんて！」と感動する私です。今回も、私は職業音楽家としてゲスト出演します。しかし、私にはアメデオの臨時メンバーになってみたい密かな願いもあるので。アメデオの音色は、音楽を作るみずみずしい喜びの原点を思い出させてくれるからです。今日、望みは叶うでしょうか…。

…叶った望み、と言えば、アメデオ・須藤純子さんと私の友情が見事に発展したことでしょう。この夏オープンする「ミュージア川崎シンフォニーホール」で、純ちゃんと私は仕事を共にすることになりました。共に川崎っ子である私達が、音楽を演奏する喜びから提供する喜びへ、密接にチームを組み、新しい分野に挑戦します。

第20回アメデオ演奏会、どうぞ皆様も、演奏する我々と同じくらい楽しい時間を過ごして頂けますように。



プロフィール



東京音楽大学付属高校を経て、ジュリアード音楽院に学ぶ。1983年日本国際音楽コンクール2位入賞。1987年リーズ国際コンクール3位入賞。これを機にロンドンと東京を拠点として活動を始める。NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、日本の主要オーケストラはもとより、フィルハーモニア管弦楽団、BBCスコットランド管弦楽団、エーテボリ交響楽団、ロイヤル・リヴァプール管弦楽団、サンディエゴ交響楽団、ラハティ交響楽団など、またサイモン・ラトル、レナード・スラトキン、オズモ・ヴァンスカなど、世界の主要オーケストラ、指揮者との共演も数多い。ベルゲン音楽祭、オーストラリア室内音楽祭、ラトビア音楽祭など海外の音楽祭に参加。英国ではBBC主催音楽コンクールの審査員を務める。

1996年の武満徹ピアノ作品集の録音以来、北欧最大のレーベルBISと専属契約を結び、話題を呼ぶ15枚のCDをリリース。現在、ドビュッシー・ピアノ作品全集の録音が進行中である。2003年に発売されたドビュッシー・シリーズ2枚目は英グラモフォン誌を筆頭に世界各誌で特選盤となっている。

2001年、英国の実力派ピアニスト、キャサリン・ストットとピアノデュオを結成。2003年、2人のために作曲されたBBC委嘱作品、G・フィットキン作曲の2台ピアノ協奏曲「サーキット」を世界初演。タイムズ紙他で絶賛された。ストット&オガワの初CDは2003年秋に発売。日本ツアーが今年の秋に予定されている。

今シーズンは、フィルハーモニア管弦楽団、BBCフィルハーモニック、BBCウェールズ・ナショナル響、ロイヤル・フィルハーモニー、香岩シンフォニエッタ、スイス・リサイタルツアー、ロンドン・ウイグモアホールでのリサイタルなど、国際的に活発に活動している。

1999年文化庁芸術選奨文部大臣新人賞受賞。

2003年「第5回ホテルオークラ音楽賞」受賞。

2004年7月オープンの「ミューザ川崎シンフォニーホール」のホールアドバイザーに就任。



第 19 回定期演奏会 共演 杉並区立久我山小学校合唱団「マザーグースファンタジー」

今までの演奏会で共演いただいたみなさまからのメッセージ

青山 忠さん（マンドリニスト） 第7回、第16回定期演奏会

第20回定期演奏会の開催まことにおめでとうございます。

アメデオの演奏会は、その趣向をこらしたプログラムが毎回の楽しみのひとつです。私も2度ソリストとして呼んでいただきましたが、合奏団・ソロ歌手・ピアニストといった多彩なゲスト、テーマを決めた選曲など変化に富んだ構成にはいつも感心しています。最初から最後まで飽きさせない様々なしなかけが魅力だと思います。

メンバーの社会の中での立場も変わっていく中で、小穴雄一・中村亨の両氏を中心として、大所帯の団体が20年という長い成長を続けてきたことに敬意を表するとともに、これからもアメデオらしさを失わずに歴史を重ねてほしいと願っています。

斎藤 明子さん（ギタリスト） 第9回定期演奏会

アンサンブル・アメデオ第20回定期演奏会開催、おめでとうございます。

私は第9回にアランフェス協奏曲をご一緒させていただきました。マンドリンオーケストラとアランフェスが弾けるとは思ってもみませんでしたが、私にとっては、新鮮というよりはむしろ懐かしい響きの中で、楽しく演奏させていただきました。というのも、私は中学・高校とマンドリンクラブに所属していたのです。マンドリンパートになったものの、初めて握ったピックというものに悪戦苦闘！その頃大学生だった小穴さんがコーチとして私たちのクラブにいらしてくださり、出来が悪くいつも最後まで残されてしまう私を「大丈夫！いつかきっと出来るようになるから！」と明るく励ましてくださったことが、昨日のことのようです。

アメデオは現在ギターパートが30人もいるとのこと、見せ場もたくさん用意されているそうですね。頑張っかっこいいところを見せてくださいね！応援しています！

八木 秀夫さん（チンバロニスト） 第13回定期演奏会

結成20周年、おめでとうございます。第13回定期演奏会の時に組曲ハーリヤノシュ、その他数曲をハンガリーの民族楽器チンバロンで共演させて頂きました。

他のマンドリナンサンブルではちょっとやらないような曲を次々とこなしてゆくアンサンブル・アメデオの皆様のパワーにはただただ驚嘆するばかりです。

これからのますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

松川 由美さん（歌手） 第18回定期演奏会

アメデオさん、20回公演おめでとうございます。

ご一緒させて頂いてからずいぶん月日が流れましたが覚えていらっしゃるでしょうか？

みなさんの第1印象はパワフルの一言ですね！

ときどきしながら始めてのリハにお伺いしたら、すごい人数でお迎えくださってますます緊張していたらすぐにお声をかけてくださってテキパキと段取りを組んでいただき、私はその後どんどんアメデオさんのうずに巻き込まれていきました！

素敵な会場でみなさんのパワーに後押しされて、アンコールの頃には別の世界へ…。もう1度あのステージに立ちたいですね。

🎵 20 回の演奏会をふりかえって 🎵

今だから言っちゃいますが、実は私、演奏会の後の打ち上げ…会場を出るところまでは覚えていますが、その後の記憶が一切ないんです…目が覚めたら家のベッドで寝てました（＾＾；）

そんな私ですが、またご一緒させて下さい（もちろん打ち上げまで）。

今度もめずらしい軽やかな音楽を、みなさんの奏でるそよ風に乗せて歌いたい！！

きっと今日も素敵な風を奏でるのでしょうか。

みなさんのこれからに、おめでとうございます！

日 尾 裕 子 さん（杉並区立久我山小学校合唱団指導者）

第 19 回定期演奏会（杉並区立久我山小学校合唱団）

第 12 回、13 回、15 回定期演奏会（練馬区立光和小学校合唱団）

アマデオの皆さんと小穴さんと合唱団の子どもたち

「音楽」に囲まれて生まれてきた子どもたち。赤ちゃんがおなかの中にいる時にはモーツァルトが良いと言われ、授乳室ではオルゴールの音色が流れ、母親は子守唄を歌い…と、無条件に音楽が注がれ、音楽であふれていた幼児期には予想もできないことですが、小学校では音楽の授業は週 2 回、それも高学年になるとちょっぴり減っていき、中学校ではもっと少なくなり、高校では選択になり、その後は自分で見つけていかないと「音楽」を聴きにいくこと、ましてや作り出すことなどできません。

今、週 2 回の音楽の授業で「やらなくちゃいけない音楽」の中にいると、自分たちで時間を心から音楽を愛し、楽しみ、仲間たちと素晴らしい音を作り出しているアマデオの皆さんを見るたびに「音楽に向かうこと」の原点を感じずにはいられなくなるのです。

「合唱団」募集。久我山小学校の子どもたちとは、音楽の授業だけでのお付き合い。それもまだ数ヶ月。授業だけでも精一杯なのにそれ以外の時間を使って「音楽」に親しみたいと思う子どもははたしてどのくらいいるのか、何人集まるのだろうか正直言ってとても心配でした。20 人集まったらやってみよう、そんな思いからスタートしたのは平成 13 年度の秋のことです。

年度末の「お別れコンサート」でのアマデオの皆さんとの交流は、授業時間以外の時間を使ってでも「音楽」に親しみたいと思う子どもたちへ、大人になってからも「音楽」を心から愛し、楽しみ、仲間たちと素晴らしい音を作り出すアマデオの皆さんの演奏に触れ、一緒に歌い合わせ鳴り響いた時の感動を味わわせてあげたい、というほんのご褒美のつもりで、合唱団がスタートした時から考えていたことです。昨年度の定期演奏会で共演させていただいたこと、今年度の秋のコンサートでも交流できたこと、それらが子どもたちの生き方にもつながる貴重な体験だったことは言うまでもありません。

指揮をしてくださった小穴さん。「小穴先生」と呼んでいたら「やめてー」と言われてしまいました。前任校の練馬区立光和小学校合唱団のときからの付き合いですが、光和小学校合唱団はコンクールに出て「勝つ」という目的もあり、夏休みは毎日 4 時間以上も練習するなど一日の生活の中で合唱団を優先できる子どもたちが集まっていました。その子どもたちが小穴さんの振る指揮を見て大爆笑して歌えなかったことを思い出します。そして、久我山小学校合唱団の子どもたちは初めて指揮を見たとき確か、「えっ、ここで笑っているの？」「ウソでしょ、どうして…」といったような戸惑いがありました。久我山小学校合唱団は朝練習が中心なので色々なことを両立しています。子どもたちは大人は、尊敬する親をはじめ、塾の先生だったりサッカーや野球のコーチや監督だったり常にまじめに教え導いてくださるものであり、まさかそんな大人がこんなことをするはずが無い、と思ったのではないのでしょうか。でも、どちらの子どもたちも、ユーモアいっぱいパフォーマンスたっぷりの指揮をしてくださる小穴さんが大好きでした。それはきっと小穴さんのお人柄によるものだけではなく、その

20回の演奏会をふりかえって

棒の先からあふれる音楽は常に豊かで温かくてそしてとっても心地よいもの…。それを感じる取ることができたからではないでしょうか。また、冬の凍てつく体育館での練習で一生懸命のその額の汗を見てしまったこと、そんな衝撃と出会ったことで心が大きく揺れ動いたに違いありません。

一生懸命生きていて素敵な大人たちに囲まれたことで、合唱団の子どもたちも自分の生きがいを見つけて素敵に生きていく、そんな大人になっていくんだろうなあ、と思います。

光 田 稔さん（前杉並区立久我山小学校校長）

第19回定期演奏会（杉並区立久我山小学校合唱団）

素敵なめぐり合わせ！

19回定期演奏会のための合同練習を久我山小学校の体育館で数回持たせていただきました。しかし、どうしたわけでしょうか前日までの好天は「一転にわかにはしゃぎ廻り」となり、練習当日は必ず雨降りやミソレになってしまうのです。

「アメデオ」と打つとワープロの変換は「雨で悪」「雨で汚」「雨で尾」…。敬意を表して「アメデオさん」と打つと「雨でお産」なんて変換してしまう。どうしてこんなに雨とエンが深いのか。♪アーア久我山は今日も雨でおー♪と何度も歌ってしまいました。

11月に入ってから練習はアメに加えてものすごい寒さでした。団員の方々はダウンジャケットや分厚いコート、襟巻き姿、まさに耐寒訓練状態でした。本当なら暖房の効いた練習場がなりたいでしょうに、本当に申し訳なく思いました。

合同練習を小学校で拝見しました。ハラハラドキドキ…私は正直言って心配でした。これは、最後の大田区民ホール アブリコのリハーサルでも同じでした。

しかし、アメデオの皆さんはいつもニコニコ、指揮者の小穴さん中村さんも困った顔は全くなさいませんでした。

子どもたちがその気になったのは、開演間際の日尾教諭のイッカツと、ジーパンやダウンジャケットからタキシードや舞台用の衣装に着替えた団員の皆様、そして満員の各席を見た瞬間でした。そして、奇跡が起きたのでした。

人の集まる場所は、学校もサークルもすべてめぐり合わせだと思っています。めぐり合わせがよければ申し分ありませんが、悪ければとんでもないことが起こりかねません。

一年以上も前からこのコンサートのために細かな打ち合わせや準備を地道にしていらっしゃった裏方さん、練習のための楽器が少ない中でいろいろ工夫されていらっしゃったパーカッションの方々。ギスギスしないで終始笑顔を絶やさず調和を保てる人たち、こどもたちの歌声に涙を流せる人たち。素敵なめぐり合わせの集い。これがアンサンブル・アメデオなのだと思います。

2003年1月18日の第十九回定期演奏会の前日、わたしは教員生活最後の誕生日を迎えました。僕にとっても思い出深い演奏会となりました。これもめぐり合わせでしょう。

素敵な出合いやめぐり合わせは人を幸せにします。どうぞ、これからもアンサンブル・アメデオの皆さんの演奏が、聴く人たちをいつまでも幸せにしてくれますように。

20回の演奏会をふりかえって

杉並区立久我山小学校合唱団メンバー

第19回定期演奏会後にいただいたお便りより

1月18日のコンサートはたのしかったです。とくに、マンドリンやいろんながっきとうたったのが、とってものしかったです。マザーグースファンタジーでは、いっぱいのが入っていて、うたうのがむずかしかったです。一番むずかしかったのが、はしらの時計のところでした。なぜかという、下のほうをうたっていたからです。アメデオのみな様ありがとうございました。

♪ 3年 ♪

アメデオのみなさんへ
ありがとうございました！
とっても×3 楽しかったですっ！！
また、できればごうりゅうしたいですね！
よろしくおねがいします——！

♪ 3年 ♪

この前のコンサートとても楽しかったです。楽器もいろいろしゅるいがあった、とてもおもしろかったです。ほんばんも、すごくはくりょくがあって、すごきでした。これからも、がんばってください。

♪ 4年 ♪

3月のお別れコンサートで指揮の小穴さんから「こんどのコンサートに出てもらいたい！」と言われたので「じょうだんでしょ！」と心の中でさけんでいた、ほんとに今年出るようになったので、びっくり。1200人くらいのコンサート会場だときいたので、声がつまっていたところではなく、足がひるんでうたえないと思っていましたが、ふつうの朝練習でもがんばって、土よう日にはアメデオの人と練習して、本番でもがんばっていつものようにうたっていたら「マザーグース、マザーグース」と、いったしゅんかん、ちがうせかいにいるみたいにこえが出ました。わたしの心にのこったマザーグース・ファンタジーでした。

♪ 4年 ♪

いままでにない思い出ができてとてもうれしかったです。またアメデオのみなさんと合わせて歌いたいです。

♪ 4年 ♪

とってもすごいコンサートをありがとうございました。ぼくは次の年合唱団をやめようかどうかしようかまよっていましたが、このコンサートでやめないことにしました。コンサートにあんなにお客さんがきているから失敗しないか心配でしたが、うまくいってよかったです。

♪ 4年 ♪

コンサートの共えんとても楽しかったです。リハーサル時は正直「平気かなあ」とか思っていたけど本番ではすっごくうまくできたと思います。自分でもうまくできたと思いました。日尾先生が言ってたんですけど、アメデオのホームページのけいじばんですごくほめてくれたそうですね。すごくうれしかったです。パンフレットってふつうは曲目だけだけど、アメデオのパンフレットは曲の説明や、作曲家などのプロフィールものについてすごくおもしろかったです。帰りについ読んでしまいました。

♪ 5年 ♪

コンサートの時はありがとうございました。まことに感謝しております。最初、ステージに立つ時、緊張していましたが、アメデオの方々が演奏してくれたおかげでリラックスできてまちがえずに歌えました。成功したのはアメデオの方々がいたからだと思っています。心から感謝しています。

♪ 5年 ♪

コンサートによんでくださってありがとうございました。ぼくは、歌う前にすごいきんちょうしました。しかし、みんながはつらつしていたのでぼくもきんちょうしないで歌えました。来年もまたやりたいです。よろしくおねがいします。アンサンブルアメデオの皆さん、ありがとうございました。ぼくはサッカーをしています。

♪ 5年 ♪

私は、アンサンブル・アメデオさんときょうえんさせてもらってとても楽しかったし、うれしかったです。いっしょうの思い出になったと思います。それと、おあなさんはおもしろかったし、みりょく的で、よかったです。私がしょうらい、もし、しき者になったらもっとおもしろいしき者になりたいです。

♪ 5年 ♪

いままで、アメデオのみな様といっしょに練習して、つらいこともあったけど、とっても楽しかったです。だから18日のコンサートの日は、歌っていると、すごい楽しい気分になりました。

私は、またアメデオの方々といっしょにコンサートにでたいと思っています！とにかくいままではありがとうございました。

P.S.おあなさんに質問なんですけど、第二部に出てきたダースペーダっておあなさんなんですよ！

♪ 5年 ♪

1月18日のコンサート、無事終了しました！！

やる前は、正直マンドリンのコンサートなんか私たちが出ていいのか？！などと思いながらも練習をしていたのですが、実際成功してから思ってみると「合唱団に入っていてよかったなあ、こんなことめったにないなあ」と思えるのです。私は去年の9月に入団しました。ちょうど「マザーグースファンタジー」の練習がはじまったころです。いいときに入ったなあと思っています。ありがとうございました。

♪ 6年 ♪

1月18日のコンサートありがとうございました。ぼくは、ハンブティのソロで本番とても緊張しましたが、アメデオの人たちが応援してくれたおかげでなんとかうまくできました。また、共えんできる事を楽しみにしています。よろしくおねがいします。

♪ 6年 ♪

練習の時は曲がながいなあ～とか思っていたけど、本番はもう、5分くらいしかなかったように思えた。けれど頑張れるだけ頑張りました。もう、せいっぱい頑張りました。またこのような機会があればまたやりたいです。「小穴さん」の指揮もとてもおもしろい(?)ってゆうかよかったです。またメガネをおとしてほしかったですう～。ナンチッテ……。だけどとっても良いけいけんでした。

♪ 6年 ♪

すばらしい演奏会でした。共演させていただき、ありがとうございました。客席で祈る思いで見せていただきながら、胸がいっぱいになりました。結成しても間もない合唱団がここまで力を出せたのも、大きなステージを成功させたい！と子どもたちにも思わせて下さった皆様のお陰です。ステージを降りてきた子どもたち一人一人の誇らし気な輝くような興奮した顔を見て、大きな成長を感じました。

世話役として練習からかかわらせていただきましたが、いつも子どもたちのことを最優先に考えていただき、心から感謝しております。至らない点多々あって、ご迷惑をおかけしたこともあるかと思いますが、ご容赦ください。本当に、本当にありがとうございました。

♪ 保護者 ♪

一生の思い出になる経験をさせて頂きありがとうございました。大ホールで、大勢の観客の皆さんの前で歌う事ができた子供達！！そしてそのチャンスを与えてくださったアンサンブル・アメデオの方々への感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

♪ 保護者 ♪

大きな会場、大勢の観客の前で、アメデオの皆様の素晴らしい演奏の中で、共演させていただいたことは、子供にとって、貴重な経験になり大きな財産となりました。又、きっと大きな自信にもなったと思っています。本当にありがとうございました。心が一つになるということを実感させていただき、感謝しております。

♪ 保護者 ♪

1月18日のコンサート、大変感動しました。すばらしいの一言につきます。

日尾先生との出会いにも感謝の私共ですが、アメデオの皆さんとの出会いにも本当に感謝しております。当日、子供達の引率のお手伝いをし、リハーサルの際にも立ち合わせていただきました。アメデオの方々の真剣さがきっと子どもにも何かを教え、伝わったと思います。ありがとうございました。

♪ 保護者 ♪

久しぶりのコンサート。子どもが出演するということ同様、マンドリンの演奏がとても楽しみでした。(お別れコンサート以来、マンドリンの優しい音色のとりこになり...)開演からゾクゾクしっぱなしでした。子どもたちとの合奏では、マンドリンの音色も子どもたちの声も共に生かされていて、聞き応えのあるものでした。子どもも毎回喜んで練習に出かけていきました。よほど楽しいんだろうな、と思い鑑賞したコンサートはすばらしかったです。ご丁寧な指導を本当にありがとうございました。3月も楽しみにお待ちしております。

♪ 保護者 ♪

編曲の歩み

アンサンブル・アメデオのために編曲した作品を並べてみました。結構いろいろやりましたねえ…来年はなにをやるのでしょうか？夢は尽きないものです…

「メリークリスマス」（これが最初だったような気がします。たしか第2回のクリスマスコンサートのときの終曲。結構盛り上がったような気がします。そのときのアンコールが「サンタが街にやってきた」。そういえばアンダーソンの「そり滑り」もこのときでした。これってその後何回もアンコールでやりました。でもこれギターが超絶技巧でしたね。そのころからギターパートの工夫が始まったのです。ぼくも少しは成長したような気がしますが…そうでもないか…と誰かが言っています…）

その調子でメドレーものを続けて作りました。最初が「ディズニー」次が「サウンドオブミュージック」（これは長かったですね。やりたいものを全部詰め込んだら相当長い曲になってしまいました。そのあと光和小学校の合唱団と再演したときは、さらに長くなりました…）それで「日本のうた」と続けました。（やりたいものはなんでもやるっていう感じがにじみ出ていますね、このあたりは…）

第9回ではスペインの特集を組みました。このころからお国巡りが始まります。アメデオの世界旅行ってところです。ギタリスト斎藤明子さんをお迎えて「アランフェス協奏曲」をやりました。明子さんのギターは素晴らしかったですね！いまは軽井沢に在住とのことでお元気そうでした。「三角帽子」（ファリャ、これ感動しました。かなりはちゃめちゃめでしたけど。全身全霊を投じるっていうのはああいう感じなのだろうと…）「スウェーデン狂詩曲、夏至祭」（アルヴェーン、最初譜面が出たとき誰も弾けないんじゃないかっていう声が出てましたっけ…最後まで弾けないところもありましたね。）、「ペールギュント組曲」（グリーグ、第一組曲だけでなくアラビアの踊りと、ソルヴェーグの歌もいたしました。）、「カレリア組曲」（シベリウス、これ結局かなりいい演奏になったような記憶が、とくに3楽章は魂爽としていました！）「過ぎにし春」（グリーグ、いい曲でしたね。でも、これどこかで崩壊したような…）

フランスものをということで「アルルの女」（ビゼー、これは第1組曲でしたね。もう一度やってみたいですね。）、「マメールロワ」（こういうのはアメデオの路線にぴったりです。これも再演したいナンバーですね、いいものは何度やってもいいですから…）そして「惑星」。（よくやりましたね。著作権のことで心配していましたが、たまたまこの年に切れて許可がすんなり降りたのを覚えています。でも全部じゃなかった。これもいつの日にかまた再演したいですね。とてもいい曲でした。あのころはいきいきブラザという老人ホームの施設で練習していたのを覚えています。火星、金星、木星と海王星でしたっけ、冥王星だったかな？いわゆるマジシャンっていうやつで、結構苦労しました。大海原に行く海賊船みたいなのが良かったですね。）この年に「魔笛」の序曲をやりました。（久々のモーツァルトは楽しかったですね。今度いつかモーツァルトばかりの音楽会をやりたいです。）

そういえば「マザーグースファンタジー」の初演もこのときでした。（光和小学校の合唱団のうたの声は素晴らしかったですね。心が洗われるようでした！共演は2年間かかってようやく実現しました。アンコールで「青い地球は誰のもの」を熱唱しました。作曲家富田勲さんには直接、編曲の許可をいただきました。この曲はそのあとたびたびとりあげましたが、アメデオのテーマソングになるくらいみんなのお気に入りの曲です。当時、光和小学校でのお別れ発表会でも演奏しました！このときのテーマは「Never ending journey to fantasy land」でしたが、これはいまでもずっと流れている路線のような気がします。

「ハリーヤノシュ」（コダーイ、これもハンガリーのお伽ばなしでした。ショットという出版社の管轄で編曲の許可をとるのが大変でした。結局1回かぎりの演奏を条件に許可が降りました。編曲はこのあたりが結構大変です。それにしても八木

20回の演奏会をふりかえって

さんのチンバロンかって良かったですね。」「ローマの松」(レスピーギ、これも大曲でした。ジャニコロの松が素晴らしいかったですね！この年はイタリアの年でしたから「ナブッコ」の序曲もいたしました。」「ボエムパラフレーズ」(ブッチーニ、個人的にはこれとても気に入っています。もう痛快って感じでのりのりでした。)

次の年は日本の曲ばかりやった年。「木挽歌」(小山清茂、これもいい曲でしたね。作曲家小山さんの奥さんが終演後楽屋にいらっしやいました。」「管弦楽のためのラプソディ」(外山雄三、これも外山さんにじきじきにお電話して編曲の許可を得ました。太鼓は揃っていますか？というアドバイスが印象的です。)

次の年はロシアの特集でした。ロシア5人組の作曲家みんなの作品を並べるという企画。メインは「スペイン奇想曲」でした。(リムスキーコルサコフ)個人的には「ホヴァンシチーナの前奏曲」のほうが気に入っていました。(ムソルグスキー、トレモロがきれいでした。このとき合唱団「白樺」と共演しました。合唱との共演のために5曲編曲しました。なかでも印象に残っているのが「はてななき荒野原」でした。(ロシア民謡、かなしい歌で、涙がにじみました。)大好きな「ドムラの協奏曲」も再演しました。(プターシュキン、荒涼としたロシアの大地にひとりたたずむという感じの名曲。)

ロシアの次は「アメリカ特集」でした。このときの目玉はなんといっても小川典子さん。「ラプソディインブルー」(ガーシュイン、これは見事な演奏でした。)この年もかなり精力的に編曲しました。「舞踏会の乙女」「忘れし夢」(アンダーソン)「ホリデーフォーストリングス」(ローズ、この曲なかなかいいです。でも調がマンドリン向きではありませんでした。今度もしもう一度どこかでやる機会があったら、移調しましょうね…)そして「ウェストサイドストーリーメドレー」(バーンシュタイン、久々のメドレーでした。痛快まるかじり！)

次の年はなんでしたっけ？そうそうなぜかフランスとロシア…コンセプトが乱れてきましたね…このあたり。でも松川さん(ソプラノ)をお迎えして呼吸することをみんなで覚えました。アンコールのシャンソン「愛の小途」は素敵でしたね。「コッペリア」(ドリーブ)「オールベルニュのうた」(カントループ、これは素晴らしい曲です。まだまだたくさんいい曲が残っています。来年あたりやってみたいですね…これかなり本音です！)「小組曲」(ドビュッシー、これはちょっと心残りでしたね。)その年の目玉は「1812年」(チャイコフスキー、亨くんはチャイコが好きみたいです。どうもそんな気がして、そういえばチャイコって結構やっていますよね。そうなるといよいよ「白鳥の湖」あたりをやるのかな…メルヘン路線にもぴったりだし…)

やれやれ、ようやく去年まで辿り着きました。去年もやりたい放題って言う感じでした。「おもちゃの交響曲」(レオポルトモーツァルト、おもちゃの楽器より角ちゃんがつくってくれた衣装のほうが目立っていました。)」「子供部屋」(アンゲルブレシュト、これ個人的には一番気に入っている曲です。アメデオでは4回サマーコンサートをやりましたが、そのときにも弦楽だけのバージョンでやりました。すべてフランスの童謡の旋律に印象派の和声でおめかししたとってもお洒落な曲。でも地味でしたね…)「マザーグースファンタジー」(これ再演でしたけど、合唱団が変わりました。できたての合唱団でしたが久我山小学校のこどもたちのうた声も天まで届くようでした！久我山小学校とはまた共演できるかな？今度はフランスの童謡あたりはどうでしょうか？)「魔法使いの弟子」(デュカ、これはアメデオ最大の難関でした。いろいろ難しい曲をやってきましたがこれは極め付けだったに違いありません。)」「時の踊り」(ボンキエルリ、みなさん覚えていますか？これのディズニーのファンタジアの印象が強烈ですね。あのピンク色のカバの軽やかなステップ！そう、ここでもファンタジーというコンセプトはつながっていました。それでこれはちょっと著作権的には問題になるのですが、アンコールでいろいろとやってしまいました。でもジョンウィリアムズには少なくとも2回は手紙を書きましたから無断ではなかったので許してください。告白すれば「ハリーポッター」と「スターウォーズ」でした…

というわけで、やはり長い年月だったように思います。これからは何が飛び出すのかまったく見当もつきませんが、夢が尽きないということだけは確かなことです。また、メンバーのみなさんと話しあって構想を練っていきます。おそらく今宵演奏会の終わったあと、このホールのすぐそばの旅館「朝陽館」で打ち上げの宴会でいろいろ話しが盛り上がることだろうと思います。というわけで、命の続く限り、アメデオの「ファンタジー構想」を大いに膨らませていきたいと思います！

(小 穴 雄 一)

♪ アンサンブル アメデオ ♪

指揮	小穴 雄一(19)	中村 亨(20)			
1stマンドリン	石川 義則(3) 河村 忠耕(3) 五味 清美(7) 高橋 正志(18) 浜田 洋行(17) 山本 敦子(16)	石橋 一彦♪(20) 久保田 朱(4) 賤津美保子(7) 千種浩二郎(3) 村上 真澄(18) 渡邊 安彰(初)	大崎 和彦(18) 栗原 久美(6) 桜内 友子(8) 中村 直将(初) 森 真理(初)	小川 雅代(7) 小門 孝彰(5) 澤田奈緒美(8) 新岡 泰則(8) 盛 裕子(初)	勝 千賀子(初) 高麗 輝章(6) 須藤 純子(19) 野村 香(11) 山田 隆裕(初)
2ndマンドリン	相澤 健男(2) 上野 康子(12) 神谷 暁美(3) 佐藤 寛子(3) 中佐藤洋子(16) 広瀬 治子(2) 山形かおる(10)	荒井 剛(3) 江澤 貴子(2) 川又 秀夫(5) 杉山 康志(18) 野口あゆみ(9) 平山 維子(2) 鷺谷 章子(5)	飯田 由香(初) 岡部文都子(4) 黒田 希(3) 染谷美佐子(7) 野村 綾子(初) 松井(諏訪多)れい(19)	市川知左子(初) 小倉 明子(13) 甲本祐紀子(初) 竹安久美子(6) 畑 美千世(9) 町田 一郎♪(20)	一関 恵子(2) 金井 裕子(3) 駒木恵理子(初) 友利美智瑠(初) 日比謙一郎(2) 森田 安代(7)
マンドラ	秋山 嘉保(5) 川又 香(3) 佐藤 祐一(初) 平柳 幹子(初) 安中 紀章(3)	飯田 裕美(10) 北川 輝彦(13) 島 大輔(3) 藤崎葉菜子(初) 山田 淳一(19)	植木 高(7) 木下 雅雄(6) 鈴木 憲靖♪(19) 松島 朋子(9) 山本興一郎(3)	大西 典子(13) 小池 弘昌(2) 染谷光一郎(9) 三木 晃彦(9)	小川 高洋(2) 坂倉 美樹(3) 高市なつみ(初) 宮坂 環(4)
マンドチェロ	小穴 雄一(19) 杉山 知孝(初) 古家 淑美(13)	大西 晶子(5) 高橋 誠(初) 山田 喜勝(4)	大橋 青樹(初) 竹安 裕之(14) 山本 葵(初)	大村 徹(初) 谷口由美子(10)	清水 孝浩(14) 深沢 誠一♪(16)
マンドローネ	加藤 純(初)				
ギター	大池 栄一(6) 岡山真由美(11) 鎮目 一幸(初) 津村久美子(17) 宮永 厚(9)	大池まゆら(6) 小川 光男(5) 佐藤 暁子(2) 廣田 裕子(13) 安田 勝彦(初)	太田 紀子(2) 奥村 美佳(2) 首藤 好美(16) 榊川 大輔(4) 山本 香織(13)	大村 慎一(初) 工藤健太郎(8) 関口 敦子(9) 松原 淑子♪(17) 吉澤 昌子(8)	大村奈津子(6) 小南 雅子(初) 田中 久子(2) 宮坂 文隆(7)
コントラバス	荒木 浩志(13) 箕田 文夫♪(19)	石井 冬樹(13) 吉田 昌之(13)	金高 瑞紀(初)	竹中 敏明(12)	中村 亨(20)
フルート	木村 裕(3)	田端紀久夫♪(9)			
オーボエ	廣田 敦彦♪(7)	須藤かおり♭(6)			
クラリネット	谷本 吉宣♪(12)	藤田麻希子(5)			
ファゴット	関根 太郎(初)				
パーカッション	荒木 俊行♪(20)	木下 将司♭	杉田 洋平♭	東嶋 園子(5)	田中 教順♭
ピアノ (練習ソリスト)	足利 弥生(3)				

()内：定期演奏会出演回数 ♪：パートトップ ♭：賛助出演

ステージマネージャ 久保 光司



♪ 団員募集のお知らせ ♪

アンサンブル・アメデオでは団員を募集しています。「音楽が好き」「マンドリンが好き」という方がいらっしゃいましたら、どうぞご参加ください。ご希望の方は下記までご連絡下さい。

1st マンドリン	石 橋 一 彦 (0466-34-8411)	ギター	松 原 淑 子 (048-683-3370)
2nd マンドリン	町 田 一 郎 (03-3698-3105)	ベース	箕 田 文 夫 (048-766-3448)
マンドラ	鈴 木 憲 靖 (03-5249-2046)	その他	中 村 亨 (042-338-8416)
マンドチェロ	深 沢 誠 一 (03-3369-7476)		

Ensemble Amedeo Homepage : <http://www.ne.jp/asahi/ensemble/amedeo/>

